
肝試し

朋次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
肝試し

【Nコード】
N48780

【作者名】
朋次郎

【あらすじ】
病院の怪談メインの話

NO1

僕の2階の部屋からは病院がよく見える。

だがあそこは今年の春につぶれたらしい。六階建ての建物はまだまだ新しく見えるのに。

僕の弟の巳太はひどいぜんそく持ちだからあそこには世話になった。発作がひどくなって入院していたことも何度かある。

あの病院がつぶれてからは仕方なく隣町まで診察してもらいに行くようになった。ママはあそこが一番近くて良い先生がいたのに、いまだに残念がる。なんでも赤字で潰れて以来、次の持ち主がなかなか決まらないそうだ。

夜になって電気もつかない病院はとても不気味だ。梅雨時にはもう幽霊が出るらしいといううわさがでた。僕は信じていないけれども。

僕は辰雄。11歳。小学校の5年生。いいたくないがクラスの中で一番背が低いのでチビと言われる。喧嘩をしても負けてしまう。いびりの中心人物は健二だ。あいつはクラスで一番背が高い。背の低い僕が目障りらしいのだ。僕は勉強こそ苦手だが、体育は得意だ。かけっこやサッカーではクラス一番だ。飛び箱もドッジボールも誰にもまけない。健二はそれが許せないらしい。ちびは小さくなってる、とかいう。言葉の暴力は許せない。あいつは空手をやっているというが僕は負けない。

1学期の終業式の日、とうとう健二と大喧嘩になった。身体が小さい分あいつより小回りがきくから隙を見て噛みついてたりした。すると健二は蹴りを入れてきた。空手の蹴りだった。ぼくは空手を知らないのに卑怯ではないか？その一発でぼくの左腕全体にじいんとしびれがきた。もっとも2日もたてばなおったけど。

僕は喧嘩にまけてとても悔しかったのでこの夏から空手を習い始め

ることになった。道場は家の近くになく駅2つ分向こうのへんぴな場所にあった。

すると、あいっ、健二もそこ道場性だったんだ。畜生め！

NO2

健二は黒帯だった。強いはずだ。僕がどんなにがんばってもケン
力で歯が立たなかったはずだ。

あいつは道場で稽古している間は、何もいわなかった。空手の先生
は等々力先生と言って、2メートル近い大男でとても強そうだ。格
好いいんだぞ。

初めての空手の稽古はきつかったが、汗をかくのは楽しかった。
1回やって僕は続けられそうだと思った。週2回の割合で通うこと
に決めた。稽古の時は白い空手着に白い帯をぎゅっと巻く。技の区
切りごとに僕たち生徒は「押忍!」と言って、手を交差させる空手
独特のあいさつをする。大きな声で「押忍!」というごとに強くな
っていきそうな気分だ。

等々力先生が入門したての僕をみんなの紹介してくれた時、黒幕
や緑帯の連中にまじって当然健二もいた。先生はお互いが強くなる
ように助けあうんだぞ、みんなで強くなり、みんなが仲間だぞ、と
いうことを忘れるなど、言った。

が、健二は聞いていなかったようだ。

更衣室で健二と二人だけになったとき、あいつはすすつと近寄っ
てきた。

「ちびはこの1回だけでやめるんだな、どっちにしたって俺には
かなうわけないぞ」

といいやがる。僕は健二を突こうとしたが、うまくかわされてしま
った。それで髪をひつつかんでやった。健二は僕をはがそうとした
が僕は決して離れなかった。なに、空手は初心者でもしがみついて
離れないのはできる。健二は僕をなんとかして振りほどこうとする。
そこへ等々力先生がやってきて、ぼくらを引き離れた。

二人とも先生の部屋へ呼ばれてすごく怒られた。健二は無傷で髪
がほんの30本ほど抜けただけだったが、僕はなおりかけていた左

腕がまたしびれてきた。ちくしょうめ！！

でも先生の手前、仲直りの握手をした。

一応、

礼儀上だ。

僕は復讐をちかったね。健二も目をあわせない。ちびがどうしてそんなに悪いのだ。おまえは性格異常者だろ。いつかきつとこの健二に勝ってやる。

ぼくは家に帰っても、覚えてたの空手の型を使ったトレーニングをした。しびれる左腕をかばいながら、した。

だけどママが怒るんだ。勉強しなさいって。って親ってどうしてこう、子供のことをわかってくれないのだろうか。大体ママがちびだから、ぼくもこんなにチビにうまれてきてしまったのだ。それと思うとママのことがちよっぴり嫌いになる。

弟の巳太なんかパパ似だから、ぼくよりも背が高い。知らない人が見ると巳太の方がお兄さんと思うはずだ。年が1コしか違わないのに、背が高いだけで態度がでかくなったような気がする。本当はぜんそく持ちで、ひゅーひゅーと咳をするくせに。

身体が弱いから巳は家で本ばかり読んでいる。お化けや幽霊の本が多いかな。勉強も好きらしい。だから成績も良い。当然ママのお気に入りだ。バカだよ、あいつ。ひよろひよろで頼りない感じ。背を丸めて本を読む姿を見ているだけで腹が立つこともある。だから、僕は巳太が気に入らないときは、背中をめがけて蹴ってやることもある。

空手ってな、おもしろいんだ。稽古すればするほど強くなるんだ。やってみればわかるよ。ちびでも蹴りが決まればでかいやつでも、棒きれのように倒れる。

あつ、まだはじめたばかりなのでそこまではできないけれどな。

黒帯の人たちを見てれば見あきないぞ。みんな強いぞ。早くあなりたいなあって思うぞ。

稽古は厳しいので終わると汗びっしょりだ。そしてすっきりした気分になる。

何度も言うがぼくはちびなのでかけっこそ早いが勉強はためだしクラスで軽くみられていたように思う。でもこの頃自身がついてきた。誰かが背丈のことだからかっても、頬を一発バシン！で決まりさ！最もその日の夕方、親が呼ばれて謝りに行く羽目になるだろうけれどもな。

そうしているうちに昇級審査の日が決まった。1カ月後の日曜日に午前中が昇級審査で午後が有段者たちの練習試合があるという。ぼくはまだはじめたばかりで受験はできないがきつとこれから役立つだろうから見学においで、といわれてわくわくした。

空手の級数は帯の色でわかるようになってる。もしぼくが審査に出てうかれば白帯から黄帯になれるそうだ。早くそうなれたらいいなあ。

その次は緑帯、そして茶帯、最後に黒帯。聞くところによると健二のバカは4歳のころから空手をしているそうだ。

ぼくが一生懸命見よう見まねで稽古の型をしていると横目でくすと笑ったり、僕の方をまっすぐ見据えて突きの稽古をしたりする。あれは絶対にわざとだ。腹が立つが僕はまだ弱い。今に見ておれよ、と無視して一人で鏡の前へでて黙々と稽古する。

等々力先生はぼくと健二の仲が悪いのを心配して、道場同士の試合があるときは仲間になるのだから、ケンカしないように、と注意した。黒帯の方が白帯の初心者、つまりぼくを気遣ってあげないといけないと健二をさとしてもくれた。健二は先生や先輩たちの前では神妙にしていたが基本的に知らん顔だ。この道場で小さいときから稽古しているから大人の生徒とも全員知り合いだ。健二、健二、とかわいがられている。ぼくは絶対に負けてはたまるもんかと思っただね。

さて幽霊がでるといふ病院の話に戻ろう。

さつきも言ったように夏休みの昇級審査だ。ぼくははじめたばかりの白帯だが次は黄帯をめざす。うんとがんばれば受けさせてもらえるかも・・・。

それで自主稽古をはじめた。せまい庭でやるとママは勉強しろと怒る。仕方なく例の病院の駐車場で稽古することにした。あそこは広いんだ。病院の敷地は家のすぐそばだし。駐車場は門が閉められてはいるが、なにあんなもの、ないのと一緒にだよ。鉄条網なんか誰かがさきにまんなかを大きく広げてくれていた。ぼくはちびだからくらくとくぐれた。ちびにだっていいこともあるさ。

自主稽古はおもに夜だ。あんまり遅くなってもママが怒る。学校が終わるといったん家にかえる。荷物を置いておいて汚れてもいい服に着替えてさあ出勤だ。大体5時くらいから夕食までかな。ぼくは駐車場のどまんなかに行く。道場よりも広々としていてどんなに暴れようが大丈夫だ。くつをぬいではだしになると、日中にやけたアスファルトが心地よい。柔軟体操からはじめて突き、蹴りの稽古をする。型の稽古も難しいし、ぼくは覚えが悪いのですぐに忘れてしまう。まだ痛む左腕をかばいながら懸命に稽古したよ。

稽古は日が沈んでも、月明かりと街灯の光で十分だった。この駐車場には週末になるとスケボー好きの連中も遊びに来ていた。彼らはぼくよりも年上だったが近所に住んでいて小さいころからの顔見知りだったしすぐに仲良くなった。

一番仲良くなったスケボー仲間は1学年上の6年生の小島、そして中1の武石、笹見だった。3人とも空手にはあこがれているんだって。ぼくは型を教えてやった。連中もスケボーの乗り方を教えてくれた。

駐車場のすぐ後ろに当然例の病院が黒くそびえたっている。が別に何もおこらなかった。第一怖くともななんとなかったのだ。だって巳太の小児科の診察の順番取りにいかされたりしていたし、家はすぐそこだし。おじいちゃんもここの病院でずっと前に死んだのだ。どうしてあそこで幽霊がでるのだ？ばかばかしい。

幽霊がいる！と真顔でいうヤツは同じクラスにもいたが信じているのは病院から遠いところにすんでいるヤツばかりだ。同じ町内にいるヤツはばくも含めて信じていない。スケボー仲間もそうだ。

昇級審査もあと3日ばかりに控えたころだたかな。たまたま、その日に稽古していたのはばく一人だった。スケボー達は来なかった。そろそろ帰ろうかと思っていたと背後の病院からぱっと明かりがついた。明々とした。ばくの影が駐車場の表まで、すすーっとのびた。でも、すぐに暗くなった。ほんの一瞬だったから気のせいだと思った。でも何となく気味が悪くなって後ろも見ずに帰った。

次の日にスケボー達がきたのでこのことをいうと、何のことはなかった。

「今度、町内の子供会の肝試しはこの病院に決まったそうだ」
「ばくはなあんだ、と思った。教えてくれたのは小島だった。お父さんが町内会の会長だからわかったのだろう。きのうの明かりのことをいうと、ばくは知らなかったけど、多分下見に行ってたのだろうという。毎年小学生の低学年は、盆踊りの後、近くのお寺で肝試しがあるが、今年は病院になったのだろう。でも怖くないや。こんなところ・・・」

NO5

いよいよ審査を明日に控えた。どのみち受けられないとはわかってはいても、いろんな人が稽古をみにきて有段者の試合も見れる。楽しみだ。

だからいつもより自主稽古を丁寧にした。あつという間に夜の8時になった。いくら夏休みでも遅くなるとママが怒る。だから帰ろうとした。するといっしょにいたスケボー達が「誰かが来た」という。

確かに駐車場に誰かが入ろうとしていた。大人が3人と子供が1人だった。

どこかで見たことのある奴らだな、と思ったらそれは、ぼくが通っている道場の連中だったのだ。街灯が明るかったので誰かはすぐにわかった。うち、1人は四季さんというやさしくて強い黒帯だった。後の人の顔は知っていたが、名前までは知らない人だった。子供はなんと、健二だった。

ぼくは4人の前に立って、押忍！といってあいさつした。4人は驚いたようだ。

「ぼくです。田中辰夫です」

そういうと四季さんは「やあ」といって笑った。

健二はぼくのあいさつに答えず嫌な顔をした。嫌なヤツはお前じや、このばかと思っただが何もいわないことにした。

ぼくは大学生のお兄さんに「稽古ですか？」と聞いた。すると「肝試しにきた」という。ぼくは言った。

「幽霊のうわさなんかうそですよ、ぼくは毎晩ここで稽古しているけれど幽霊に会ったことないよ」

四季さんや大学生のお兄さんたちは顔を見合わせて「ふむ、」といった。すると健二が

「中にも入ったこともないくせにうそをつくな！」と叫んだ。

ぼくはもちろん言い返す。

「この中にはなあ、100回は入っているぞ」

「それは病院が病院だったころの話だろ、ぼくだって1000回は入っているさ」

「まあまあ」

四季さんたちがぼくたちの間に立った。ぼくたちの仲が悪いのを良く知っているようだ。健二は大人たちに聞こえないようにしてクチパクで「このちび！」とささやいた。ぼくはかっときて殴ろうとしたがお兄さんたちがぼくをおさえた。

「けんかはいかん、いかん」

ぼくは悔しかった。ちびは確かにちびだけれど、どうしてからかい的になるのだろうか。負けるものかと思った。健二はきつと大きくなっても弱い者いじめをするようになるだろう、お前なんかに絶対にもけるものか！

お兄さんたちは病院の暗い窓を見上げていた。

「確かに夜の人気のない病院は不気味だな、辰夫くんは勇気があるねえ」

ぼくは照れた。ほめられることにはなれていないんだ。

「家が近いし、家族みんなでお世話になってたし、全然へいき、怖くない。駐車場は広いし」とむにやむにやと返事した。

四季さんだけが懐中電灯をもってきていた。

「じゃあ、たいしたことないだろうけれどせつかくここまで来たのだし、行くだけは行ってみるか」

スケボー達はおずおずと「ぼくらも行ってもいいですか」と聞いた。お兄さんたちはいいよと、うなづいた。それで何となくぼくも含めて全員で行くことになった。

きつと遅くなってママに怒られるだろうけれど、おもしろそうだよな。健二がいるのはおもしろくなかったが、場合によるとおもしろ

ろくなるかもしれないだろ？な？

そうだろ？

カンの良い小島は健二がぼくの左腕をけがさせたヤツと察したようだ。スケボー3人組は健二の背後で、くいつとあごをしゃくつてぼくに目配せした。

はっはー！

決まりさ！

暗黙の了解ってわけさ。

ぼくは、ぼくそえみながら黒帯のお兄さんたちに「案内するよ」と申し出た。

NO 6

メンバーは空手の四季さんはじめ先輩たちと健二で4人、ぼくとスケボー達で4人。

合計8人か。

懐中電灯は1個で十分だった。その方が雰囲気が出る。肝試しとしては時間も少々早いがいいじゃないか。おじいちゃんが入院していた時によく見舞いに行っていたから病院の中も良く知っている。スケボー達も町内の人間だから良く知っている。知らないのは空手の連中だ。彼らはこの町の人間ではなかった。

病院の正面玄関はすぐ目の前だがもちろん閉まっていた。透明の大きなガラスがあつたはずの場所にはベニヤ板がしっかりとかぶされ「閉院になりました」と書かれたビラが貼つてある。しかし横のガラスまでは板はかぶされてはいない。一番大柄の先輩がそこから開けようとしたが開かない。

「ガラスを割つてしまおうか」

という意見が出てきた。でも見つければ問題になる。裏口までまわつてみた。すると1つだけ開いていたのがわかり、そこから入ることにした。少し高い位置から入ることになるが大丈夫。でも、最初に電灯を持って入った四季さんが

「ここ、誰かが出入りしているのじゃないかな」

と言い出した。電灯を近づけてみるとそのガラスのレールだけほこりがないという。

僕は返事をした。

「そういうば昨日電気がついていました。すぐに消えたけど」
スケボーをもつたままの小島も答える。

「お父さんが今年のお祭りのあとの肝試しはこの病院にしようか、
と言っていました。誰かが下見にきたのかもしれない」

四季さんたちはうなづいた。月明かりで病院に電気はついていな

くとも十分に見通せた。しかし階段とエレベーターのあたりは真っ暗だ。健二はいつもの勢いもなく無言だった。ぼくはほくそえんだな。

「そういえば、昨日の夜、電気がついたとき誰かがいたような先輩たちが言う。」

「下見の人間かもしれないが、浮浪者かもしれない。もし浮浪者なら捕まえて追い出してやろう」

小島がささやいた。

「でも幽霊話が出たきっかけの話を知っていますか？」
四季さんたちは聞きたがった。

「いやぼくらは知らないんだ。なんでも閉院が決定した時に、退院どころか引き取り手もない身よりのおばあさんが手術室で自殺したとか？」

それはウソだ。ぼくは大声で笑い出しそうになった。言い忘れたが実はぼくのパパはこの手術室で働いていた。看護師として手術室の器具を消毒したり準備したりしていたのさ。

ぼくは入ったことこそないが一度だけ手術室の手前の部屋の窓からのぞかせてもらったことがある。あそこで自殺なんかできっこないし、もしそういうことがあればパパは教えてくれるだろうさ。ぼくはその話は教えないことにして提案した。

「じゃあ、その手術室へ行ってみましょうか」

「辰夫くんだったね。場所がわかるのか」

「はい、わかります。3階です。何度も来ているしよく知っています」

ぼくは得意になって先輩たちを案内した。先輩たちは珍しそうにきよろきよろとあたりを見回している。スケボー達も見慣れた病院が変わり果てている様子に興味深そうだった。

ただ健二だけが皮肉な調子で

「それじゃお前のパパは失業したんだ」

といった。四季さんが健二の頭をぐつんと叩いた。

「なんてこというんだ。バカ健二。あやまれ」

ぼくは寛大になって言った。

「いいんだ。パパはもつといい病院にいるよ。ちょっと遠くの病院になったけど給料も上がったし」

四季さんは健二の頭をまだぐつぐつと叩いていた。健二はしゅん、となった。ぼくは心の中でみていな、と思っていたから別にあやまってもらわなくとも平気だった。そしてみんなを手術室の中に案内した。

この病院は1階と2階が外来で3階が手術室とリカバリールームと検査室だ。4階から6階までは病室になる。エレベーターは当然ながら動かない。3階まで階段を使う。スニーカーを履いていたのでそんなに足音はしながきゅっきゅというゴムのこすれる音がいたやだった。

すでに誰かが探検をしたのだろう、廊下や階段のすみっこには砂がたまっていた。どういうわけがみずたまりもある。明りは懐中電灯の丸いわっかのみ。それが何重にもぼくたちを取り巻いている。周囲の闇がおしよせている感じだった。怖くはなかったがいやに心臓がときどきしているのがしやくだった。

2階の踊り場まであがったとき、下からカーン！という金属音がいきなりした。みな、飛び上がった。音を出したのは小島だった。「ごめん、スケボー板をかべにぶつけた」

暗くて足元がよろけたそうだ。でもぼくは正直言っで心臓がとまったりかと思うほどびくりした。健二はどうしているかとみれば、やもりみたいにかべにはりついて息をはずませていた。四季さんが明るい声で、ははは、と笑い出した。

そこから3階の手術室まではすぐだった。部屋自体には窓はないが廊下からの窓から月明かりが少し入ってかろうじて見えるくらい。そういえば手術室は直射日光が入るとだめなんだ、とパパがいつていたのを思い出す。薬の管理にも影響するからというはなしをする。みんながなるほど、という顔でうなづいた。しかし奥にいくと懐中電灯1個だけだと暗すぎた。それで手術室はすぐに出て長い廊下を歩く。すると小さなホールに出た。

病院が病院であったころはこのホールには薬をつんだワゴンやベツドがあった。白衣を着た人たちが何人も行き来していた活気があ

った。でも今こうしてみればうそみたいだ。もう何もかもなくて空っぽだった。赤字でつぶれたのは本当だったのだなあと感じる。そしてやはり不気味だった。

ぼくのとなりに小島がきた。小島はぼくのひじをちょっとつついてウインクした。どういう意味かはわからなかったが、これからなにかするのだ、ということはわかった。

小島はぼくにおもむろに質問した。

「なあ、おれちよつとおしっこしたくなった、トイレはどこだっけで、ぼくもおもむろに答えた。

「確かつきあたりを右だったよ」

「暗いが大丈夫かな」

「トイレには窓があるから見えるさ」

小島は隣にいた笹見をさそって、つきあたりのトイレに行った。スケボー板は持ったままで。ぼくたちはこのまま待つことにした。けどしばらくたって二人ともトイレから出てこない。

四季さんが心配そうに言った。

「ちよつと、遅いかな？」

ぼくはちよつとにやにやしてきた。武石も口元がゆるんでいる。

ぼくは言った。小さなささやき声で。

「そつえばトイレで誰か首をくくった人がいたかな？」

健二の肩がぴくつと動く。ぼくは健二の顔をまともに見てやった。

「手術が失敗して、気が狂った男の人だ」

そのときタイミング良く

「ぎゃあああああっ！」

というすごい叫び声がした。

沈黙。

あいつの髪と肩をひっぱったのは武石だったのだ。どうやってやったのかはわからないが見事な連携プレーだ。1階の窓まではすぐにいきついて、四季さんからはじめて次々に最初の窓から脱出した。安全な駐車場に戻る。

そこまできたら、四季さんたちはほうつとため息をついた。他の大学生も疲れたようにたばこをとりだして吸い始めた。

健二はまだしゃくりあげていた。あいつがこんなに怖がりだなんて思わなかったな。ぼくも笹見と武石で怖がっているようなふりをしていて、健二の泣き顔を見て楽しさを味わっていた。

が、小島の姿が見えない。先に帰ったのだらう。四季さんは笹見に何をみたのか聞いた。笹見はトイレの中で変な物音とささやき声を聞いた、とだけ答えた。健二が身体をぶるつと震わせる。

見事なものだ！

ぼくたちも帰ろうとした。駐車場から例の破れ穴から帰ろうとすると病院の電気が一瞬だけついた。みな動きを止めて、凍りついた。ぼくも見た。電気がついたのは1階だけだった。そしてぱっと消えた。

全員が見た。

1階の窓から、大勢の人が窓越しにこちらを見ていた。すぐに消えたけど、確かに見た。

誰かがうつつと小さなうめき声をあげた。

いや、そんなことがありえるはずがない。幻覚だらう。でも気持ちが悪い。今までそんなことなかったのに。

気のせい、気のせい。

四季さんは黙ってもう一度懐中電灯を病院にあてた。もちろん見えるわけがない。何もないし、誰もいない。ぼくは思わず言った。

「小島のヤツ、先に帰れたのだらうか。大丈夫かな」

四季さんは振り返ってじつとぼくの顔を見た。ぼくは急に小島が心配になったのだ。でも誰ももう一度病院に戻って様子を見ようとはいわなかった。健二の泣き声がふたたび大きくなった。案外気の

弱いヤツだったんだな。

院内の人影の話はもうだれもせずそのままぼくたちも帰った。
それにしても後味の悪い肝試しだったのである。

次の日が昇級審査だった。

前の日も遅かったし日曜日だったが早く起きた。昨日の肝試しの後
はなかなか寝付けず起きることができるか心配したが、顔を洗った
らすっきり、しゃんとできた。

病院の中に一緒に入った人たちとは今日の審査でも会うはずだ。

審査の後、有段者は全員、練習試合にでることになっている。

トイレでのうめき声と健二へのいたずらはもちろん、ぼくのスケ
ボー仲間がやったことに間違いはない。しかし窓の人影は何だった
のか？どう考えても理屈にあわないので考えるのをやめた。でも思
考があの人影にいきついでしまう。人影は一人ではなく大勢だった。
気持ちが悪いのはそこからきている。やめよう、考えるのはやめに
しよう。

昇級審査に行く前に小島の家によった。やつは朝起きのパジャマ
のままで玄関まで出てきた。

「やあ、おはよう。きのうはおもしろかったな」

「やつぱり、あれは演技か」

「はははははは」

「武石のやつもうまくやつただろう？」

「うん、健二はずっと泣いていたなあ」

「あははははは！」

ぼくたちは際限なくげらげら笑った。でもぼくは最後に見た人影
のことを言うと全然信じてくれなかった。

「だめだよ、ぼくまで騙しちゃあ」

とかいう。ちょっと怖くなったようだ。ぼくも話すのをやめた。

それからチャリンコをこいで道場まで走って行った。

審査の時間ぎりぎりだったが着替えに間に合って、最初から見学できた。道場のすみっこにすわって見ていると等々力先生からは「次回は黄帯をねらってうけるよ」と励ましてくれた。

そう、次回の審査には絶対合格するさ。だから今から毎晩自主稽古しているのさ！

一方、健二のやつはよく眠れなかったのかぼうつとした顔をしていたなあ。ははは。

四季さんがぼくの横にすわった。ぼくは空手のあいさつで「押忍」というと大きく笑ってぼくの頭をなでくれた。

「あの子、何といったかな、先に帰った子は大丈夫だったか」

「小島くんです。押忍。今朝家に行ったら、ちゃんと言いましたよ！」
「きのうの肝試しはおもしろかったな」

「押忍」

「もしかして、あれ、お前たちの芝居か？」

「・・・・・・」

「昨日は動転したが、冷静になってみるとおかしいぞ」

ぼくは言葉につまった。けれど四季さんの目が笑っていたのでほっとした。

「さ、怒らないから言うてごらん」

ぼくは観念した。四季さんは最初からわかっていたのかもしれない。この人だけが懐中電灯をもっていて、終始一番先頭を歩いていた。

スケボー仲間の目配せなどがガラス越しに目の端に入っていたのかもしれない。

「押忍・・・」

「健二がいたからか？」

「押忍」

四季さんはまた笑った。そして「しょうがないなあ」というふうにぼくの頭を軽く小突いた。ぼくは笑ってもらって良かったと思う。

だって健二はともかく四季さんたちにはまったく恨みはない。だ
ましたということで、ちょっと後ろめたい気もあったのだ。

休憩をはさんで黒帯同士の練習試合になった。年齢と段位の低い
順番だったので健二は最初だった。けど、初心者のぼくから見ても
へろへろだった。試合開始後10秒足らずで自分より背の低い相手
に蹴りを入れられて一本取られた。しかも上段回し蹴りで、だ。あ
いつは無様にぶっ倒れた。はっはー！ざまみろ、だ。昨日のシヨツ
クをひきずっていたのだろっね。ぼくの気分は最高に良かった。

ざまあみろ、ぼくをちびだの何だのとバカにするからこういう羽
目になるのさ。今度の昇段試験も落ちて、ずっと落ちまくって白帯
に戻れ！

かわりにぼくが黒帯をとるさ。

健二は鼻血がたくさん出て介抱してもらっていた。空手着の前半
分は血だらけだ。ぼくは大満足して家に帰った。もちろん、帰り道
に小島に報告することも忘れなかった。

病院に一瞬着いたあの明かりと人影だが確かに気持ち悪かったが
すぐに忘れた。あれから道場でも、病院にはやっぱり幽霊がいたら
しいという噂さも出た。多分大学生たちが言ったのだろっ。が、
四季さんは何も言わなかったし、健二もおとなしくなった。

健二はぼくに泣き顔と一本とられて無様に負けたところを見られたのがよほどくやしかったらしい。ある日にいきなりスパarringしようといってきた。スパarringというのは、手足と頭に防具をつけて試合にみたいにするのだ。乱取りともいう。これも大事な稽古なのだが、帯の色が違う者同士のスパarringは禁じられている。力量がちがうと怪我の原因になるからだ。

おい、ぼくはまだ白帯だぞ？

その日、等々力先生は休みだった。先生の休みを見計らって誘うところが、嫌なヤツだ。まわりも年下の小学生ばかりだった。いさめるのは誰もいないし、ぼくも断りたくなかった。

やられるのはわかっていたが、逃げたくなかったのだ。

結果はもちろんぼくの負けだった。なおりかけた左腕もろつ骨も蹴られてぼこぼこになった。健二は蹴ったり殴ったりしながら「思いましたか、このチビ！降参しろ！」

と叫んだ。ぼくは絶対に降参しなかった。健二はたおれたままのぼくを蹴っていく。気が遠くなりかけたとき、誰かが誰かを呼んだようだ。

「やめ！」

という大声が道場中に響き渡った。

四季さんだった。

健二の方をまっすぐ行くと、いきなり健二を蹴った。

「バカ野郎！」

健二はこの一発で、ずでーんと床に転がった。お腹をかかえて、小さい声で「押忍」と言った。ぼくも床にのびていたから、健二とまともに目があってしまった。健二の目がおびえていた。

健二はぼくが怖いのだ、とふと思った。

それきり意識がない。ぼくは失神したのだ。

気がつく和家人だった。起き上がると身体中が痛い。でも大丈夫だろう。布団から抜け出て腹這いになってジューズをのんでいたら、ママに見つかった。ママが金切り声で寝てなさい！と怒った。痛いけど別に平気だ・・・。

ママは言う。

「四季さん、という人が車で運んでくださったのよ。もう空手なんか危ないからしてはだめよ。辰夫、もうやめようね」

空手をやるなんてとんでもない。ぼくは返事する代わりにママのスカートを思い切りめくった。ひるんでいる間に弟の巳郎が読んでいた本を取り上げ、窓の外に放り込んでやった。ま、これはいいだけで。

で、外に出ようとしたら、等々力先生が玄関にいた。ぼくは驚いて棒立ちになった。ママもぼくを叱ろうとおっかけていたが先生を見て黙った。先生はあきれたようにぼくを見た。

「辰夫君はちゃんちゃだなあ」

先生のうしろからちょこんと健二が出てきた。恥ずかしそうにぺこりと頭を下げた。あやまりにきたのだ。駅前のケーキ屋さんの包みをもっていやがる。けつ。でもケーキは好きだから食べるだろうな。

等々力先生は四季さんの連絡でぼくらのケンカを知ったようだ。

用事が終わったらすぐ健二を連れて見舞いにきてくれたのだ。先生と怖い顔をしたママの前でぼくたちは握手をした。

「健二は決まりをやぶったから、1ヶ月間の稽古禁止を言い渡した」等々力先生が言うと健二はうなだれていた。やりすぎた、と思ったのだろう。ちょっとかわいそうになって「もういいよ」と言っただけだった。

「いつか黒帯を取って、お前を倒してやるから」と言った。ママはあきれていたが本気だった。

思えばぼくが空手をはじめたのも、こいつのせいだ。こいつは座っていても背が高いのがわかるが今はぼくの家で小さくなっている。等々力先生がいきなり笑った。

「辰夫君は最後まで降参しなかった、とか。先生は大いに期待しているよ。な、健二もそう思うだろう。白帯はすぐに降参して当たり前なのに、最後まで抵抗したのだから」

健二は蚊の泣くような小さい声で

「そう思います」

といった。ぼくの勝ちだ。

スパarringでは負けに負けたけれど、勝った！と思った。先生は言った。

「辰夫君にもう一度、きちんとあやまりなさい」

「すみませんでした・・・」

健二とぼくはしばらく黙りこくったままだった。が、何となくおかしくなってきた。健二はぼくを見てにやつと笑った。ぼくも思わず笑い返した。それから二人で声をあわせて笑った。

はははははははは！

ケンカはそれまでの話になった。健二はぼくのことを、ちび、とか言わなくなった。そうしてみると案外いいヤツだったこともわかった。

ぼくはあいかわらず夕方から夜まで例の病院で自主稽古を続けている。そのことを知った健二は、お前は努力家だ、とほめた。

「おれも家が近かったら一緒にやるが、塾の夏期講習も行っているし、無理だな」

残念そうだった。小さいころから空手を稽古しているだけあつてぼくにいくつも有益なアドバイスをくれた。ぼくたちはだんだん仲が良くなった。そのことを等々力先生も四季さんも喜んでくれた。

夏休みのクライマックス、盆踊りが近くなった。子供会の肝試しは、結局あの病院ではしないそうだ。前の持ち主がそんなことをすると、変なうわさが出て余計に買い手がつかなくなると怒ったそう
だ。

それもそうだな。パパに聞いてみると赤字がすごくて誰も後を
継つぐという人がいないそうだ。

病院の持ち主はおもしろくなかうが、駐車場は絶好の子供の遊び場だ。広々としているので爆竹を鳴らすヤツが出てきたりして
ますすにぎやかになってきた。

病院の中を探検したヤツの話も聞いた。でも何もなかったらしい。
前にぼくたちが入ったときの作り話がどこでどうなったか、独り歩
きをしている。幽霊話をしたり顔で伝えて本当らしいぜ、と耳打ち
するヤツもいた。そんな話を聞きたびにスケボー仲間を教えてやっ
てゲラゲラ笑った。

ついでながらぼくもスケボーは上達した。スケボー仲間にも空手
の型を教えてやったりして、ぼくたちはいつもつるんでいた。で、
ついつい帰りが遅くなってしまふ。ママは毎晩怒るけど、楽しい仲
間だから仕方ないよと思つてほしい。

ママにはお気に入りの巳郎がいるではないか？あいつはぼくから
見てもいい子だ。ぜんそく持ちのせいもあつて、ママが外に出した
がらない。例の病院では小児科一番のお得意さんだった。いい子だ
よ、一応……。というのはその分、ぼくが悪い子になるわけ。

巳郎もママの言いつけをきちんと守る。脱いだものはきちんとた
たむ。くつをそろえる。ハンカチをもつてポケットに入れる。戸を
きちんとしめて開けっ放し、散らかしっぱなしはしない。お勉強も
大好きで成績も良い。なにかもい子で悪いところはとくにない。
ぼくはママのいいつけはたいてい窮屈なので聞かない。すぐ忘れ
てしまふ。

巳郎はぼくの悪いところをママに告げ口することもある。そのたびに殴ってやるのだが・・・。

弟のくせにぼくの背丈を追い越したことも気に入らない。ま、これはどうしようもないが、兄としてこの根性はたたきなおさないといかん。そうだろう？

で、また駐車場の話に戻る。いつものように仲間と遊んでいたら健二がめずらしくやってきた驚いた。今日は塾がお盆休みだから遊びに来た、という。こいつとは仲直りしたから、ぼくたちは歓迎した。ひとしきり空手の稽古をしてからスケボーもした。

気がつくともう夜になっている。どうして遊んでいるとこんなに時間が早くたつのだろうか。

健二は家が遠いからもう帰るという。帰り際に健二は病院の方を振り返ってつぶやいた。

「おれ、もう1回あの病院に入ろうと思っている」

ぼくとスケボー仲間は顔を見合わせた。実は健二を騙して怖がらせたことはまだ話していなかった。いつか話した方がいいとは思っけれど。

健二は思いつめたように言う。

「あの時怖かった自分がどうしても許せない。もう1回入って恐怖心を克服したい」

立派なもんだ。

ぼくは最後に明かりがついたときのぞつとした感覚を思い出した。あれから駐車場にいても変なことは起こらない。幽霊話もうそだし、ただ、あの奇妙な感覚だけは不思議だった。

健二は「明日も塾は休みだし、決行するよ」といった。

見れば今も懐中電灯を持っている。もしかして今日にでも、本当は行くつもりだったのかもしれない。しかしぼくたちもいたし、行き

そびれたのかもしれない。

健二が帰った後、ぼくとスケボー仲間はどうするか相談した。本当のことを言ってもいいのだけど、ほんの少しの好奇心も出てきたのだ。あいつとはもう仲良くなっているから怒りはしないだろう。きっと。一緒に行くべきだろうな、責任上。

すると小島は変なことを言い出した。

「あの時先に帰ったけど、ちよつと、あつたんだ・・」

「何が？」

小島はためらっている。今まで話せなかったのか？

「話してみろよ」

ぼくは促した。小島は迷っていたが思い切ったように言った。

「あの時、確かに先に帰った。みんなより先に階段を下りる。入ってきたガラスの方に向かうだろう？」

「うん、うん」

「誰かが一緒に走ってきて階段を下りたんだ」

「えー？」

「気のせいかと何度も思ってたけど、それが1人でなかったんだ」

「ふうん？ 後ろは見たのか」

「怖くて振り返れなかった。きっと気のせいだったんだろう。病院の外に出たのはぼく一人だったし」「足音だけ、か」

小島は首を振った。

「足音じゃないよ。はあはあ、という息遣いだった」

結局。

翌日、肝試しに参加するのは、ぼくと健二だけになった。あとの笹見や武石は小島の話聞いてぶるつたのだろう。外はまだ日がかたむいておらず明るい。明るいうちにしてしまおうというのだ。

スケボー仲間は外で見張っておくという。

そうしてもらうつもりだ。万一のために。

健二は自分の携帯電話を持ってきていた。用意周到なヤツだ。さあ、行こうとすると意外なことに弟の巳郎が外を通りかかった。ぼくは、おおい、と呼びかけた。

「こつちへ来てみなよ。今からおもしろいことをするから！」

巳郎はしぶしぶという感じだったがぼくたちの近くまできた。今から病院の中へ肝試しに行くからお前もくるか？と聞いた。怖がらせるつもりだった。巳郎はきつとこういうだろう。

お兄ちゃん、いい加減いたずらばかりだめだよ、

病院の中に入っちゃいけないよ、

ママにいつけるよ、

が、巳郎は、目を輝かせて肝試しに行く、という。嬉々として病院を見上げている。小島も巳郎の喘息を良く知っていたから

「怖くないのか？喘息が出たらどうするんだ」と心配した。

巳郎は行くといつてきかない。意外に勇気があるのだな、ぼくは弟をちよつぴり見なおした。

結局、ぼくと健二と巳郎の3人が行くことになった。意外な組み合わせになったがあとから思えば、これも運命だったかもしれない。ぼくたちは例の裏口の窓のところまでスケボー仲間に見送られて、肝試しに行くことになった。

「巳郎、ぼくは個々の中に入るのは2回目だ。怖くなったらお前はぼくらに構わず逃げていいから」

「ううん、ぼく、ぜんぜん怖くないよ。だって小さいときから喘息のせいで何回もここに入院した。だからとても懐かしいよ」

実際、巳郎ときたらひどいぜんそく持ちだ。入院していて、学校へ行けなかった時期もある。懐かしく思う気持ちは本当だろう。

ぼくと健二は窓を軽々と越えて院内に入った。巳郎はぼくより背が高いくせに、2人がかりでささえてやらないと窓枠にも登れない。まったく運動神経ゼロじゃないか。手間のかかるヤツ。

まだ外は明るいから前回と違って病院の廊下も楽々と歩ける。待合用のいすとかが全部取り払われているのでやけに広々としてみえる。

巳郎は本当にうれしそうに先にたって歩く。

「ほら、兄ちゃん、ここはぼくが通っていた小児科だよ!」

部屋を示すプレートも全部はずされていて、どこが何の部屋だったかわからなくなっているが、巳郎にはわかるようだ。

肝試しの雰囲気はまったくなかった。巳郎はさっさと診察室に入る。診察室も机もベッドもなく、がらんとしていた。窓から荒れ果てた小さな庭園がみえた。ここは駐車場側と反対方向の景色を見ることになる。もっとも4、5階からだ。国道も見えるし眺めもいいだろうが。

健二はだまって部屋を見回していた。ぼくもだ。巳郎だけが喜んでいて。

健二が言った。

「俺、3階の手術室まで行ってみるよ」

で、3人で行くことにした。途中小島が変な息遣いを聞いた、という階段を使ったが別にどういうこともない。手術室の中は暗いが

怖くもなかった。多分外はまだ明るい、という気分的な余裕もあるのだろう。健二もぼくも拍子抜けした。やはり誰かが前に入ったのか、絵具やペンキで白い壁一面に落書きしてあった。食べ物のかすも散乱している。健二がごみをけちらかして言う。

「あの時は真っ暗だったからわからなかったけれど、案外人が隠れていたのかもしれないな」

ぼくもうなづいた。ぼくは小島が体験したあの話を教えてやった。巳朗は黙って聞いていた。健二は何度もうなづいた。

「じゃ、今も誰かが隠れているかもな」

ぼくらは小さく笑った。

「じゃ、トイレでもすませて、もう、帰るか？」

ぼくは健二を見た。健二はトイレの一件も本当のことを知らない。健二は巳朗に教えてやっている。

「俺、ここで髪の毛をひっぱられたんだ。同時に一緒に着ていたスケボーをもっていた子も変な声を聞いた。それでな・・・」

ぼくは早くあやまらなきゃ、と思った。うそをついて芝居をしたことを。でないと健二と二度と仲良くなれないだろう。

「ごめんよ！」

と叫んだ。健二は話の腰を折られて、けげんそうにぼくを見る。

「ごめん、あのときはぼくたちのいたずらだったんだ。だって・・・いつも君がぼくのことをバカにするから、こらしめてやろうか、と思っただ」

健二はびつくりしたようだ。

「じゃあ、トイレの話も？」

「・・・そうだよ」

健二はじつとぼくを見ていた。そして「はあ、」とため息をついた。

「俺がそんなに憎かったんだ？」

「うん、あのときはね、やっぱりぼく、ちびって言われるのが嫌なんだ」

「いいよ、俺にも悪いところがあるし。だから、なかったことにしよう」

健二はあっさりと許してくれた。心にひっかかっていた思いがなくなつてすっきりした。

「ちよつとおかしい、と思つていたんだ。そもそもこの世に幽霊なんかいない。だからここには何もいないんだ」

ぼくたち3人は帰ろうとした。手術室に通じる自動ドアを手で開ける。ホールを通つて、階段を下りて廊下を曲がればすぐにスケボ―仲間の待つ窓に到着だ。あつけない肝試しだった。

と、いきなり巳朗がポケットから吸入薬を取り出して口を開けた。しゅっしゅっ、と液を出す。喘息の発作予防の薬だ。

「なんだ、お前。ぜえぜえの発作が出そうなのか」

「ここはほりが多いから・・・」

「やつぱり軟弱だなあ、お前は！みんなと同じこともできねえんだから」

巳朗は黙つてハンカチを出して口元をぬぐう。

「女みたいにハンカチ持つんだな。ははは、ぼくはそんなもの持ちあるかねえよ。そういう潔癖さと几帳面なところがきらいだな」

「お兄ちゃん・・・」

巳朗はせつないようにうつむいた。そういうところがママの同情を買うのだろう。だから、弟をいじめてはいけない、と思いつつもいじめてしまうのだ。

先に歩いていった健二が振り向いた。晴れ晴れとした表情だ。

「なあんにも、なかったな！」

ぼくは返事の代わりに笑つて拍手した。健二はあれ、というふう

に巳朗の顔を見た。

「どうした？真っ青だよ？」

「なあに、喘息の発作がおきそうなんだ。吸入しているから楽にな

「ただらう？なあ？」

巳朗はうなづいた。

「さつき、はしゃぎすぎたんだ。だから、発作がでたんだ」

「さあ帰ろうか。こんな軟弱ものの弟なんかこっちで入院でもしていればいいさ」

「お兄ちゃん、待って！」

1階の廊下についた。角を曲がれば出口の窓だ。少し暗くなったものの、まだ日はある。廊下にぼくたちのかけが長く伸びた。スケボー仲間はずっと待っていてくれた。その時初めてぼくは巳朗がいないのに気付いた。階段のところまでは確かにいたはずだ。踊り場までは、後ろから足音もしていた。

え？踊り場まで？

ぼくは階段のところまで戻って呼びかけた。

「巳郎？どこだ。早くも戻ってこい」

何度呼びかけても返事がなかった。ぼくがあんなことをいったのでふてくされてどこかへ隠れたのか？ぼくと健二はもう一度3階まで上がった。

しかし、いない。

1階に再び下りて最初に行った診察室へも行く。

いない。

ホールや待合室にも行く。

いない！

健二も心配そうな顔になってきた。

「もしかして、先に知らない間に帰ったのでは？」

健二の携帯電話を借りて家に電話を試してみた。ママが出てまだ帰っていない、という。「辰夫、何かあったの？」ママの心配そうな声が聞こえた。

「ううん、さっき外を歩いているのを見かけたから、なんでもないよ」

とかいって電話を切る。考えてみればぼくたちは3階の手術室に通じるホールへ出てそのまま階段を下りたはず。その時点では巳朗は確かにいた。階段の踊り場でも絶対にいたはず。先に帰れるはずはない。

健二も同感だった。

「お前、巳朗くんにひどいことをいったらう。弟なのに。いじめられた仕返しをしているのでは？俺がお前をいじめた仕返しを、前の肝試しでされたように！」

返す言葉がなかった。

多分そうだろう、と思う。ぼくはホールに出て叫んだ。病院中に聞こえるような大声で！

「おおい、巳朗！兄ちゃんが悪かったから、出てこいよ！お前が欲しがっていたあのゲームもやるから！」

しーんとしている。夕日はどんどんおちて暗くなってきた。健二は懐中電灯をつけた。

喘息のひどい発作がおきると声も出なくなる時がある。巳朗はそうなのかもしれない。健二が提案した。

「どうする？誰か大人を呼ぶかい？」

とりあえずスケボー仲間のいる窓のところまで再び戻る。巳朗が

戻るとき、ここまでくるにきまっているからだ。

「おい、巳朗は出てきたか？」

小島たちは首をふった。

「ううん」

ぼくたちの顔にあせりがでてきた。

「やっぱり警察の人を呼ぼうか？」

巳朗がもし帰ってこなかったら……。それを思うと怖くなった。パパもママもどれだけ悲しむだろうか。ぼくだって、いじめてばかりしたけれど、いい弟だったのに！ぼくは叫んだ。

「おい、兄ちゃんが悪かったから！出てきてくれ！好きなゲームでもなんでもやるから！出てきてくれえ！」

叫んでいるうちに涙が出てきた。

「兄ちゃんが悪かった！いじめて悪かった！だってお前はいつもいい子だし、弟のくせに背が高いし、腹が立ったんだ！でも、もういじめないから、出てきてくれえ！」

最後はかすれ声になった。健二がぼくの肩を抱いて、

「警察に電話するよ、いいね？」

と聞いた。

外はすっかり暗くなった。健二は携帯電話をあけて電話しようとした。

まさにその時、巳朗のかほそい声が聞こえた。

「お兄ちゃん・・・」

階段の踊り場の方からだ。ぼくも健二も急いで階段に戻った。

「上の方だったな！」

「確かに聞こえたよな？」

スケボー仲間も中に入ってきた。もう真っ暗だ。

懐中電灯と携帯電話の明かりを頼りに3階にあがる。ぼくは最初の肝試しを思い出した。あの時とメンバーは違う。大人はいないの

だ。しかしどうしても、巳朗を連れて帰らないといけない。巳朗は発作をおこして声が出せないのかもしれない。でも発作を起こしたらのどからひゅーひゅーとかすれ声が聞こえてくるのだけど・・・。ぼくはふいにこの事実を思い出してぞっとした。最悪の場合、呼吸ができなくなつて死んでしまつかもしれないからだ。

「おおい、巳朗！どこにいるんだ？出ておいで！早く一緒に帰ろうよ！」

小島や笹見も大声で呼びかけてくれた。

「巳朗ちゃん、出ておいでよ！
健二もだ。」

「巳朗くん！巳朗くん！」

でも巳朗の声も、咳の音も何も聞こえない。3階の廊下も手術室もトイレの中も誰もいなかった。

ぼくはとうとう泣きだした。武石が肩を抱いてくれた。

「泣くなよ、もっとちゃんとさがそうや」

「そうだ。きつとどこかにいるさ。だって声が聞こえたんだから」

「巳朗ちゃんは発作で声がでないか、誰かに引き留められているのかも？」

そういったのは小島だ。小島は少し震えていた。

「おい小島、変なことをいうなよ。こんなときに！」

小島は懐中電灯に照らされた壁の落書きを見ている。

「だって、この落書きやごみの山をみてみるよ」

いきなり健二が「押忍！」といって空手の型をとった。そして叫んだ。

「おい！誰が巳朗くんをひきとめているのか。放してやれよ！俺たちは空手をやっているから怒らせたら後が怖いぞ！」

それから鋭い気合いでポーズを次々に変えた。ぼくも健二の気合いをきいて少し元氣を取り戻す。

相談の結果、小島と笹見が先に出て、大人を呼んでくることに決めた。ぼくと健二と武石がここでもう少し探すことにする。3階だ

けでなく2階も1階も探した。

でも、いない。

4階から上は大人たちが来てから、ということにした。ぼくは巳朗を思っで泣けてしかたがなかった。ぼくには1人しか弟がいない。どうしていじめたのだろう。背丈がぼくを追い越したのが単純にくやしかったのだ。ママの言いつけをきちんと守るいい子だから、目障りだったからだ。

ぼくが弟をいじめると、あいつはいつも目を伏せてじっと我慢していた。ぼくならやり返すところを、あいつはただ黙っていたな。激しい運動も禁じられていたから、ぼくの空手の練習着を羨ましそうに見ていたことにあつたけ……。それまで考えたことのない弟への想いが次々に湧いて出た。涙があふれ出る。ぼくは大声を出して泣いてしまった。

「ええん、ええん！」

健二と武石がそつと寄り添ってくれた。

「ええん！巳朗！ごめんよお、もういじめたりしないから、出てきてくれよう！」

巳朗がこんなに大事な弟だったなんて、ぼくは知らなかった。早く巳朗の顔が見たい！探さねばならない。

「やつぱりぼく、4階も見てる！」

ぼくは階段を駆け上がろうとした。

「落ちつけよ、4階以上は病室だろう。たくさん部屋があるじゃないか、だれか応援がくるまで待っていようよ。1階に戻ろう！」

明かりがないと真つ暗闇だ。今夜は曇っているのか月明かりもない。さっきの声は階段の踊り場から聞こえたはずだ。

健二は一生懸命になぐさめてくれる。「きつと見つかるから」それも身にしてみた。

思えばぼくは乱暴者で、ぼくこそ意地悪なお兄ちゃんだった。背が高い、低いでささいなことではくがいじめたのだ。ぼくがみんな悪いんだ。

仕方なく1階まで戻って応援を待つことにする。階段を下りる。健二が先頭で明かりをもち、次が武石、ぼくが一番最後に下りた。真っ暗な後ろを振り返りながら。

ふと、はあはあという息遣いが聞こえたような気がした。ぼくは立ち止った。気のせいかな？健二がぼくに明かりをあてた。

「どうしたんだ？急に立ち止って？」

息遣いはもう聞こえない。ぼくは首を振った。

1階に下りた。例の出入り口の窓近くで健二の携帯電話がいきなり鳴った。ぼくたちはびくりして飛び上がった。

健二が「ママからかな？」と言う。「もしもし？」健二が受話器をいきなりぼくの方へ向けた。

「辰夫、きみにだよ？」

ぼくに？とりあえず電話を受け取った。

「もし、もし？」

ぼそぼそとした声が聞こえた。何を言っているのかわからない。「もしもし、もしもし？」

武石と健二がぼくの近くに寄ってきて一緒に耳をすませた。と、いきなりしわがれた声が聞こえた。

「辰夫かい」

「ええっ・・・おじいちゃん？」

ぼくは首を振った。おじいちゃんであるはずがない。受話器からは大勢の人がひそひそ話をしているような変な雑音がする。第一、ぼくのおじいちゃんは・・・。

「・・・もしもし、もしもし？」

「辰夫、弟を、巳朗と仲良くな。大事にしてやりなさい」

「やっぱり、おじいちゃん！」

「がちゃ、つー、つー、つー、」

電話が切れた。

ぼくはいま聞いた声が信じられなかった。確かに2年前に死んだおじいちゃんの声だった。おじいちゃんがなぜ健二の携帯電話にか

けてきたのだろうか？ありえないことがおきたのだ。

ぼくは呆然として、電話を見つめた。どういふことのない普通の携帯電話だ。でも、どうして？どうして……？

けれど1つわかつていることがある。おじいちゃんはここの病院で亡くなっている。そのほかの人も沢山ここで亡くなっている。逆に生まれた人もいる。ぼくや弟がそうだ。

ふいに小島が聞いたはあはあ、という話を思い出した。そうだ、ぼくもあれを聞いたんだ。たった今。健二も武石も凍りついたようにして、ぼくの顔を見ている。健二が不思議そうに聞く。

「お前のおじいさんか？俺の携帯電話の番号をよく知っていたな？」

「……お前のおじいちゃん、死んでるよな」

武石だ。声が震えている。そう、近所なのでぼくのおじいちゃんを知っている。

とたんに健二がぎえっ、と変な声をたてた。

ぼくはうなづいた。そりゃあ、怖かったが神経がマヒしていてかえって冷静になった。

「弟を大事にしろ、ってさ」

その時、ホールの方から声がした。

「お兄ちゃん……」

巳朗の声だ。ぼく達は走って行った。走りながら、叫ぶ。

「巳朗！どこだー！」

「ここだよ」

巳朗が目の前ドアを開けて立っていた。そこは小児科の診察室だ。最初にぼく達が入って行った部屋だ。でも、ここだって何度も探したのに。

巳朗はひょっこり立っていた。発作もおこしていなかったようだ。けろりとした顔だ。

「巳朗、今まで一体、何をしていたんだ。あんなに呼んでいたのに、

聞こえなかったのか？」

「うん・・・、寝ていたんだ」

ぼくは安心のあまり、巳朗に抱きついた。巳朗は壁にあたっ
てよけた。ぼくは泣いた。巳朗はびっくりしてぼくに抱かれたまま、
じっとしていた。

「お兄ちゃん、泣かないで。ぼく、寝ていたんだよ。知らないうち
に、ここにきて寝ていたんだ」

「こんな真っ暗な部屋で一人でねていたのか？」

ぼくはこいつが電気を消して真っ暗にすると怖くて眠れないのを
しているのが驚いた。机の上の小さな明かりをつけて寝ている。

「怖くなかったのか？ぼく達はこの部屋も探したんだよ、一体どこ
にいたんだ」

「おじいちゃんの夢を見てただけだよ、それだけだよ・・・」

ぼくたちは懐中電灯で部屋をぐるっと見まわした。もちろん、誰
もいないさ・・・。

武石が上ずった声で叫んだ。

「さ、早くここを出よう。巳朗ちゃんも見つかったから、早く、出
ようよ！」

ぼく達は例の窓までノンストップで走り、窓から滑り落ちて出て
行った。駐車場まで、早く！巳朗がまた消えてしまわないように、
手をしっかりと握ってやった。巳朗は時々、後ろを振り返る。

「どうしんだんだ」

巳朗は黙っていた。

やっとの思いで外に出た。駐車場まで来ると大丈夫！空気がすご
くおいしかった。ぼく達は思い切り深呼吸した。健二が明るい声で
言う。

「結局、巳朗くんも出てきて、よかった！」

その時小島や笹見が、ぼくの両親や数人の大人を連れて駐車場に

入ってきた。小島が最初に駆け寄ってきて「大丈夫か？」と聞いた。小島の身体は小刻みで震えていた。ママは巳朗をぎゅっと抱いた。他の大人たちはぼく達ではなく、病院を見ていた。ぼく達も後ろを振り返った。病院は真っ暗だった。当然だ。なんとなく身体がぶるつと震えた。

よくあんなところに入って、うろろろしていたもんだ、と。

小島がささやいた。

「また、見たよ……。病院の電気がまたついていったんだ。煌々として明るかった。お前達があの窓から出ると電気が消えた」

ぼく達はそういわれても実感がわかなかった。

「なあおい、電気なんかついていなかったよな？」

小島と笹見は震えている。パパやママ、数人の大人たちは押し黙っている。

「お前ら……。誰かに見送られていたぞ。それで窓から出ると元通り真っ暗になったんだ……」

「おい、小島また作り話か？」

巳朗がママから離れてこちらに来た。

「お兄ちゃん、作り話じゃないよ。ぼく達、みんなに見送られて出てきたじゃないか」

NO13 (前書き)

最終話です。ありがとうございます。

街灯に照らされた健二や武石の顔が真つ青になった。多分、この
 ぼくもそうだったと思う。と、いきなりママがやたら明るい声で「
 さあさあ帰りましょうね！」と言った。ぼくの顔を睨みながら言っ
 たので、家に帰ればお仕置きが待っているだろうと覚悟した。

パパが言った。

「誰か浮浪者がすみついていてるな。危ないぞ」
 大人達がうなづいた。

「パパ、あれはおじいちゃんたちだよ」

巳朗が言ったがもちろんおとなは誰も信じなかった。

「バカなことをいうものではないよ」

「さあ、さあ」

と促されて駐車場に出たとき、また病院が明るくなった。例の窓か
 ら大勢の人の影が映った。そしてそれらはすぐ消えた。みんな無言
 になった。

巳朗だけがあっけらかんと「今、おじいちゃんが手をふっていた
 よ」と言った。

結局あれはなんだったのかわからない。何者かが、病院に侵入し
 たぼく達を懲らしめたのか？脅かそうとしたのか？

理屈にあわない変な後味が残った。

でもパパもママも他の大人たちもあれを見たのに幻覚だ、と言う。
 絶対に認めないのだ。巳朗はおじいちゃんが見送ってくれた、と信
 じている。夢の中でおじいちゃんに励まされたそうだ。

「発作はつらいけど、いつも我慢していてえらいね、大人になった
 らきつと良くなるからそれまでの辛抱だ」
 と。

巳朗は説明する。階段のはあはあ、という声は誰かが気分が悪いから治してほしい、助けてほしい、と言っている、と。それも最初に入ってきたときから訴えていたそうだ。ぼく達には聞こえなかったが、巳朗だけが聞こえていた。

巳朗はけろりとしていった。

「でもぼくは普通の人間だよ？なにもしないからごめんね」と心の中であやまると、「すみませんでした」と消えていったという。

ぼくは巳朗の話を全面的に信じた。

あいつは不思議なヤツだ。ぼくは空手をしていると強くなれると信じていたけど、空手ができないヤツでも強いヤツはいる、とわかったんだ。

強いヤツ、というのは巳朗のことだ。ぼくはもう弟をいじめたりしなくなった。あいつは本をよく読んでいて不思議な話を良く知っていた。ぼくをいじめた健二はいじめなくなった。弟をいじめていたぼくもいじめなくなった。

あの病院が治してくれたんだ。

2回にわたる肝試しで理屈にあわないことが確かに起きた。ぼくは病院の前を通るたびに病院を見上げて思う。あの1件があつて、駐車場はかたく封鎖されて入れなくなった。

病院の内部ももう絶対に入れないようにしたらしい。ぼくを含めて子供たちの遊び場が1つ減ったわけだ。そのうち、取り壊しが決まった。パパが聞いたところによると大きなスーパーマーケットになるらしい。でも、ぼくはこの病院をいつまでも覚えているだろう。健二やスケボー仲間の小島、武石、笹見もそうだと思う。でももう入ることはない。

やっぱり怖かったからだ。巳朗は全然怖くもない、という。病院に行かなくともその気になれば仏壇やお墓にでも、おじいちゃんと会えるよ、とまた変なことを言う。以前は殴っていただろうが、ぼくはもう巳朗を殴らない。おじいちゃんはどこかで見ているだろうし、殴ることに興味がなくなった。

本当に強いのは健二やぼくでもなく、お前だよ、と言った。だって死んだ人も平気で話せるからだ。しかも怖くないのだろう？

巳朗はおかしそうに笑うだけだ。

ああ、1つわかったよ。

世の中、理屈でわりきれないことがあるってね。

今もぼくと健二は、仲良く道場で空手の稽古をしている。スケボ
ー仲間も本格的にやってみようかな、と言ってきた。

大歓迎さ。

巳朗にも身体にさわらない程度に、家の庭で教えてやったりする。

ぼく達はこの話を四季さんに教えてあげた。四季さんは言ったよ。
「肝試しは大成功だったね。楽しかったろう？いい夏休みだったな
あ」

、だつてさ。

ぼくもそう思った。健二と声をあわせて

「押忍！」

と返事したよ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4878o/>

肝試し

2010年11月19日04時25分発行